令和７（2025）年度
特定の分野に修学する学生への
奨学金事業
生活状況（中間）報告書

公益財団法人飯嶋アイング財団

１.はじめに

当財団では、特定の分野で学ぶ学生が、経済的な不安を軽減しながら学業や研究に取り組み、将来、社会の発展に寄与する人材へと成長することを支援するため、「特定の分野に修学する学生への奨学金事業」を実施している。

令和７（2025）年度の奨学生からは、経済・会計、工学、環境、医学・生命科学などに関わる学修や研究に加え、留学、資格取得、地域活動等に取り組む様子が報告された。

本報告書は、奨学生から提出された生活状況（中間）報告の内容を基に、学業・研究や学生生活の状況、奨学金の活用状況、今後の目標等をまとめたものである。

２．学生生活の状況（学業、部活、ボランティア、サークル等）

奨学生は、それぞれの学修段階や専門分野に応じて、授業、実験、実習、卒業研究、学位論文の作成等に意欲的に取り組んでいる。

経済・会計に関わる分野では、日本的管理会計や企業統治と経営の関係について研究し、学会発表や論文執筆を進める学生がいる。また、ドイツへの交換留学を通じてファイナンスの専門知識を深め、語学学習や異文化理解にも取り組んでいる。法科大学院への進学や司法試験予備試験に向けた学習に励む学生からの報告もあった。

工学に関わる分野では、有限要素法による構造解析、航空機の翼等に用いる軽量な複合材料、化学反応で動くゲルの数理モデル、超音波を用いた微小デバイスなど、多様な研究が進められている。その他にも、電気、情報、建築、土木の専門科目や実習に取り組み、進学や将来の研究に向けた基礎を固めている様子が窺える。

環境に関わる研究では、地下水の起源や流動の解明、黒潮大蛇行と気象の関係の調査、廃プラスチックの高度リサイクルなどに取り組んでいる。建築に関わる分野では、専門授業で知識や技術を学ぶほか、廃校施設の利活用をテーマとする修士研究も報告された。

医学・生命科学に関わる分野では、神経科学、麻疹ウイルスの抗原検出、核酸を基盤とした創薬、医用画像解析、タンパク質の機能解析等の研究が進められている。また、基礎医学や獣医学、食品と健康に関する学習を深め、実験や論文輪読を通じて研究への理解を広げている。

課外活動も幅広く挙がった。文化祭の予算管理や企画運営、模型制作、電子工作・無線通信、将棋、空手などに取り組むほか、子ども食堂や地域のマラソン大会でのボランティア、被災地域の水インフラ復旧支援、ペットボトルのキャップを用いたリサイクル活動等に参加している。海外研修や学生団体の運営、後輩への指導を通じて、専門知識とともに協調性や責任感を培う課外活動についても、多様な取り組みが報告された。

３．活動成果と成長の実感

奨学生からは、学会発表や論文の公表、資格取得、学業成績、活動運営等における具体的な成果が報告されている。国内外の学会で口頭発表やポスター発表を行い、研究者との議論を通じて研究の見方や伝え方を学んでいる。神経科学の学会で受賞した学生もいる。

論文については、管理会計に関する共著論文や神経科学に関する英文論文の掲載、超音波デバイスを用いた人工授粉の手法に関する論文の出版などが報告された。根毛の特徴を画像から自動測定するプログラムの開発や、化学知能ロボットの運動に関する数理的な検討など、研究手法の工夫や新たな知見を論文としてまとめる取り組みも進められている。

学業面では、非常に優秀な成績を収めた学生や、複数の学期にわたり首席を維持した学生がいる。資格取得では第一種電気工事士の資格取得が報告され、進学面では大学編入試験や法科大学

院入試の合格など、それぞれの目標に向けた成果が見られた。また、後輩の研究指導、研究計画の立案、チームの進捗管理、国際交流の運営等を通じて、指導力や実行力を高めている。

奨学金は、授業料や入学金、家賃・食費等の生活費、通学費、教科書・専門書、パソコンや研究に必要な機材、資格試験・進学試験の受験費用、学会参加や海外研修に伴う費用等に活用されている。教材や模試への充当を予定しているとの報告もあり、学修や進路に向けて計画的に役立てられている。

特に、経済的な負担が軽減されたことで、アルバイトの時間を減らし、研究や論文執筆、学会発表の準備に充てる時間を確保できたとの声が寄せられた。生活の安定と学修環境の充実が、専門性を深め、新たな経験に挑戦するための支えとなっている。

４.支援への感謝と今後への展望

奨学生からは、安心して学業や研究を続けられることへの感謝が寄せられている。また、支援は経済面に加え、自身の研究や将来について考え、目標に向かって努力を続ける励みにもなっている、との意見が上がっていた。奨学生交流会については、異なる分野で学ぶ仲間との出会いが刺激となり、今後もつながりを大切にしたいとの声が寄せられた。

研究に取り組む学生は、修士論文・博士論文の完成、学術論文の投稿や査読への対応、国内外の学会での発表を目指している。国際共同研究の推進に加え、後輩への知識や経験の共有を通じて、卒業後も研究室として連携を継続できる体制を築きたいとの目標も示されている。

工学に関わる分野では、材料やデバイス、ロボット制御等の研究を深め、大学院進学や企業での技術開発につなげたいとする学生がいる。将来、宇宙開発に携わる技術者を目指す学生や、研究で培った課題発見力をものづくりに生かしたいとする学生もいる。建築に関わる分野では、廃校施設の利活用研究の継続、学生団体の引き継ぎ、設計提案への挑戦などが上げられた。

医学・生命科学に関わる分野では、臨床に向けた知識や実践力を身につけ、地域医療や画像診断、創薬、病気の予防・治療に貢献することを目指している。食品と健康の関係について探究を深めたいという意欲や、環境・気象の研究を人々の安全や社会の課題解決に役立てたいという思いも示されている。

経済・会計に関わる分野では、管理会計やファイナンスの研究を発展させ、論文執筆や研究テーマの具体化を進めることが目標とされている。また、専門分野を問わず、英語での論文読解や発表、資格試験への挑戦、大学院等への進学を通じて、将来の選択肢を広げたいとの報告があった。

それぞれの進路は異なるものの、奨学生は学んだ知識や技術を社会に還元したいという思いを持ち、自らの将来像に向けて具体的な目標を掲げている。

５.総括

中間報告からは、奨学生が専門分野の学修や研究に真摯に向き合い、学会発表、論文執筆、資格取得、留学、地域活動等を通じて成長を重ねている様子が確認できた。

当財団の奨学金は、学費や生活費の負担を軽減するとともに、教材の購入や学会参加、海外研修等を支えている。研究や学習に取り組む時間を確保し、専門性を高めるための環境づくりにつながっていることが、奨学生の報告からうかがえる。

また、後輩への指導、地域でのボランティア、異分野の学生との交流など、自身の学びを周囲の人々や社会との関わりに生かす姿勢も見られた。今後、それぞれが培った知識や経験を生かし、研究、技術開発、医療等のさまざまな場で活躍することを期待する。

奨学生交流会については、異なる専門分野で学ぶ仲間との対話を通じ、普段の研究生活では出会う機会の少ない考え方や経験に触れ、良い刺激を受けたとの報告があった。交流会が仲間との関係を築き、支援を受けている実感を深める機会となっていることがうかがえる。

奨学生一人ひとりのさらなる成長と今後の活躍を願い、本年度の生活状況（中間）報告をここに総括する。

以上